



TITLE:

<建築の射程: 第25回> 被災地写真のアーカイブ --景観の変化を記録し記憶を紐づける

AUTHOR(S):

山本, 博之; 西, 芳実

CITATION:

山本, 博之 ...[et al]. <建築の射程: 第25回> 被災地写真のアーカイブ --景観の変化を記録し記憶を紐づける. 建築人 2015, 2015(4): 24-25

ISSUE DATE:

2015-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/229022>

RIGHT:

発行元の許可を得て登録しています.

連載

建築の射程

第25回

2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波から10年がたちました。今号は、インドネシアの地域研究を専門分野とするなかで、「デジタル・アーカイブ」という手法を用いて災害地と向き合ってこられた京都大学地域研究統合情報センターの山本博之さんと西芳実さんにご紹介いただきました。「過去と今を比べ、そこからさらに未来を思う」という災害復興への思いです。

被災地写真のアーカイブー景観の変化を記録し記憶を紐づける

山本 博之

東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門は東南アジア地域研究（災害対応と情報）。著書に『復興の文化空間学——ビッグデータと人道支援の時代』（京都大学学術出版会、2014年）、共編著に『国際協力と防災——つくる・よりそう・きたえる』（同、2015年）など。

西 芳実

東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。京都大学地域研究統合情報センター准教授。専門はインドネシア地域研究（紛争・災害と復興）。著書に『災害復興で内戦を乗り越える——スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』（京都大学学術出版会、2014年）、共編著に『記憶と忘却のアジア』（青弓社、2015年）。

災害対応の地域研究

私たちは、二〇〇四年一二月に発生したスマトラ島沖地震・津波の最大の被災地となったインドネシアのアチェ州で、被災から現在までの約一〇年間にわたって被災地の景観を撮りため、それをインターネットの地図上で参照できるようにした。

私たちが専門とする地域研究とは、政治学や経済学や社会学などのように特定の分野を専門とするのではなく、特定の地域を専門として、その地域社会について多面的に理解することを通じて、現代世界が抱える諸課題を地域に根ざして考えようとする学問分野である。研究テーマは業種や分野を超えて取り組まれる課題になることも多い。

私たちが「災害対応の地域研究」に取り組むようになったのは、スマトラ島沖地震・津波がきっかけだった。被災地で異業種・異分野の専門家に同行して、それぞれの分野の調査や取材の方法を問近で見たことでその影響を受けながら、研究対象地域が未曾有の大災害により甚大な被害を受けたとき、地域研究者として何ができるのか、研究成果を誰にどのよう伝えるべきかを考えることになった。

被災地の景観を撮る

津波直後の被災地調査では、工学の専門家であるHさんに同行した。Hさんは、被災地でとにかくたくさん写真を撮影していた。壊れた建物。唯一残された土台からわずかに延びた鉄筋の曲がり具合。大きさを比較するためにタバコの箱を置いて撮る。位置や向きを記録も大事だとの話だった。

携帯電話のGPS機能が未発達で、カ

メラに外付けのGPS装置をつけて撮影する時代だった。Hさんは、車で被災地を走りながら、数秒おきにシャッターを切っていた。それを見て、私たちも同じように写真を撮ってみた。デジタルカメラなのでフィルムを気にしなくてよいため、車中でメモリとバッテリーを交換しながらシャッターを押し続けた。

帰国して写真を整理していると、撮った本人の目には写真と写真の間の風景が思い浮かぶので被災地の様子が動画のように思い出されるけれど、被災地に行ったことがない人の目には写真と写真の間の風景は存在しないことがわかった。被災地では壊れた建物ばかり撮りがちだが、そうすると、写真だけ見ていると現地には壊れた建物しかないような印象を与えてしまう。実際には、津波でほとんど全ての建物が流されてしまった地区もあれば、一階部分が水に浸かったけれど建物は残った地区もあり、被災地は決して一様ではなかった。

壊れた建物だけ撮っていたのは被災地の様子を伝えられないと思い、次の訪問では壊れていない建物も撮るようにした。車窓から山と木々しか見えないときでも撮り続けた。こうして、毎年二、三回被災地を訪れ、車での移動中もシャッターを切り続ける調査が始まった。二〇〇六年にはソニーのGPSキットが発売され、デジタルカメラで撮影した写真に位置情報をつけることが容易になった。

被災地では人道支援や報道の専門家に同行する機会もあった。写真の撮り方で特に参考になったのは報道写真の撮り方で、被写体に焦点を当ててまわりの部分は大胆に切り捨てていた。心を動かすために顔を撮るのだと言う。埋葬地で礼拝

している女性やそのまわりで遊んでいる子どもたちの笑顔をとてもうまく切り取っている。確かに、一枚一枚が共感を誘う。いつ誰が見ても心を打つ写真とは、情報を削ぎ落とし、個別の文脈がなくても伝わる写真なのだと思う。

報道写真の焦点の当て方に学ぶ一方で、被写体に大きく焦点を当てる写真を撮ると、それがどのような状況で撮られた写真か背景がわからなくなると感じた。それは報道写真の役割であって、地域研究者はむしろ焦点を絞りすぎず、背景を含めた全体像がわかるような写真を撮るべきだと思うようになった。

景観から記憶を紡ぐ

何度も現地を訪れるうちに街並みの経年変化が見えてきた。ただし、記憶に頼って写真を撮っていたため、正確に同じ場所でも撮った写真はそれほど多くなかった。このようなときに出会ったのがメモリーハンティング（メモハン）というスマホアプリだった。メモハンを使うと、以前撮ったのと同じ場所で撮影することが容易になる。メモハンに参加することで、過去と今を比べ、そこからさらに未来を思うという営みに複数で参加することが可能になる。アチェの街頭でメモハンを行っていて、津波以前のアチェの街並みを撮り続けてきた郷土史家と出会い、撮りためた写真の提供を受けた。これにより、現在の景観の中に津波後だけでなく津波以前の風景を探することもできるようになった。過去の写真は過去のことを知るだけでなく、今を生きる人たちにとっても必要なものである。写真は、文化や地域や時代が違っていても、見ればわかるという特徴がある。



阪神淡路大震災から20年目を迎えた神戸市で大阪府立北野高校スーパーグローバルハイスクールの高校生と共にメモハンをするインドネシア人学生

阪急会館前 - 画像比較 - 1.17の記録（中央区） | メモハン



メモハンした結果はウェブ上でも閲覧できる。上は阪急会館前の様子。中央のスライダーを動かすと被災直後と現在の写真を比較できる。詳しくは <http://dsr.nii.ac.jp/memory-hunting/> を参照。

アチエでメモハンを行った後、アチエ出身のインドネシア人学生五人を日本に招き、メモハンを試みてもらった。阪神・淡路大震災から二〇年目の神戸を訪れ、日本の高校生の協力を得て、インドネシア人と日本人が二人一組になって三宮駅周辺でメモハンを行った。

インドネシアの学生たちは土地勘がないために日本の高校生の記憶に期待したが、高校生も震災時には生まれていなかったため、震災当時の記憶はない。そこで、高校生が通訳となって近所の人たちに聞き込みを行い、震災当時の写真の場所を探し出した。その過程では、地元の人々、高校生、インドネシアの学生がそれぞれの震災の記憶を語る様子も見られた。

アチエで撮りためた写真の一部は、本の形で発表する機会をいただいた。被災直後の緊急対応で生じたことや、それから一〇年間の復興過程について、それぞれ本で発表し、出版社のご厚意で、三〇〇ページに及ぶ全てのページに被災地の写真を入れていただいた。それでも私たちが撮りためてきた写真の数から言えばごく一部ではない。

文化空間の復興に向けて

振り返ってみて、これほど多くの写真を撮りためることで、私たちはいったい被災地の何を記録し、何を読み取り、何を伝えようとしているのか。私たちは、急速に移り変わっていく被災地の



スマホ・アプリ「メモハン」でスマトラ島沖地震・津波の被災から10年目を迎えたインドネシア・パンドラアチエ市で被災直後（上）と同じアングルで現在の様子（下）を撮影する。

景観を見て、何が情報として重要だと思ったのか。そのもとにあったのは、あまりに被害の規模が大きく、「死者・行方不明者は一七三〇〇〇人」「この集団埋葬地に埋葬されているのは二万三〇〇〇人」というように、災害の犠牲になった人々を数で扱わざるを得ない災害の現場を実際に訪れてみて、犠牲になった人々や生き残って犠牲者を思いながらこれからの生を全うしようとする人々には、数字にまとめられないそれぞれの経験があるという実感だった。

災害の経験を教訓として残すには、個別の文脈を落として誰にでもわかる簡単な形にすること、具体的に細かい事実からなる個別の物語を記録しておくことの両方が大切である。後者のためには一人一人の物語を聞いて集めていくしかないが、災害直後で、しかも被災者の数が膨大で、とても個別に話を聞いていくことは不可能だという現実の前で、さしあ

たりできる方法として、一歩引いたところで写真を撮り、誰もが見えるところに公開することで、人々が自分の物語を引き出す手がかりを残しておくことができるのではないかと考えた。

私たち地域研究者が行っているのは、災害対応に即して言えば、地域社会の情報のバックアップである。地域社会を構成するのは人々、財物、景観、記憶などであり、人はそれを地の上に積み重ねることで文化空間を築いてきた。災害は、建物や景観を壊すだけでなく、建物や景観に紐付けられていた記憶も壊し、文化空間を更地にする。文化空間を復興するには、建物や景観を物理的に復旧再建するだけでなく、かつての記憶を掘り上げて、新しい景観に新しい記憶を紐付けていく必要がある。被災地写真のアーカイブは、被災地の内外の人が景観に共通の経験や記憶を紐付けていく試みの一つである。